夕焼け通信
2020.2.10 1248号

編集 宮森健次

〒699-0823　島根県松江市西川津町4276-402
miyaken@me.com　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/

手作りのくらし２　41

木幡智恵美

金山寺味噌（1）

私の休息時間は一日に二度ある。一度目は昼食時からの一～二時間。撮っておいたビデオを見ながらゆっくりと昼食を摂り、日常から離れた世界に浸る。二度目は夕食を片付け、百歳の義母を寝かせ、体操を終え、風呂から上がった後の約一時間。日記をつけ終え、テレビを見ながらちびりちびりと焼酎のお湯割りを飲む。

以前は焼酎のお湯割りだけだったが、この頃は、腹に溜まらない物をつまみながら飲んでいる。これまでにつまみにしてきたものは、キムチ、大根の酢漬け、茎ワカメなどなど。「おふくろ、それはおかしいで」と言われたのは、のりたま。箸でつまみながら飲んでいると、息子が居間に降りてきて言った。結構はまって、何袋かをつまみにしたが、さすがに飽きてしまった。大体が凝り性というか、これと決めたらそればかりになってしまいがちだ。朝食は毎朝手作りのパンにウインナーやらベーコン、チーズを乗せたトースト、サラダ、コーヒー、ヨーグルトと決まっている。つまみもしかりで、一時は茎ワカメにはまり、ネットで一キロ入りの大袋を買い、息子にあきれられた。その茎ワカメも大袋が無くなった後、姿を消した。

今は何かというと、金山寺味噌だ。去年、いつもいろいろいただくOさんに、「金山寺味噌漬けたら、結構おいしいのができてね」と小瓶を持たされた。帰ってさっそく箸でつまんだところ、塩加減といい、中に入っている麹の噛みごたえといい、ナスの柔らかさと風味といい、満足度抜群だ。それを夜の焼酎のつまみにしだしたら、もうほかのものに目が向かなくなってしまった。

それからというもの、キムチやぬか漬けなどもつまみにするが、途中からはどうしても金山寺味噌に行ってしまう。いただいたものが無くなると、スーパーで買い求めるようになった。完全にはまってしまったのだ。

がらがら橋日記

宮森健次

再任用

K君とはす向かいで飲んだ。彼は、中学校の校長をしている。同学年であるゆえに、ずっと前から知ってはいるのだが、それほど親しかったわけではなく、これまであいさつを交わす程度だった。必要があってしばらく込み入った話をしていたが、ちょっと流れが変わったのを捉えて、K君が聞いてきた。

「再任用する？」

再任用というのは、退職後に教諭として再度教職に就くことをいう。K君もこんな話するのか。互いに定年が見えているのだから関心が高くて当たり前だが、なぜだか不意を突かれた気がした。

今は六十歳を越えた教員がどこの学校にもいて、その割合も年々増加している。だいたい島根県の教員は、我々世代が非常に多くて、今までずっと同年代の群れとともに学校に棲息してきたのだが、それがために、若い世代の入り込む余地がずっと乏しい状態が続いた。

年金受給までのつなぎとして再任用制度が始まると、定年による強制退去がなくなり、給料は３分の２になるものの続けたければ続けられる。ありがたい話だが、結果的に相変わらず若い人の座るべき椅子を奪っているわけである。

「いや、する気ない。」

ぼくがそう言うと、意外なことにK君は、ぱっと笑みを浮かべて、

「ぼくも。」

と、手を伸ばしてきた。ほほう、ここで握手まで求めるか。いいよ、いくらでも応じますよ。こんなことする人だったんだ。

「それで、何をする？」

まだ聞くか。K君、ぼくはまったくお粗末なことしか考えられてないのだよ。緻密な仕事ぶりで要職を務めてきた君に聞かせるようなことが言えないのだが…

「とりあえず、遊び倒す。」

哲学も何もない。無計画をさらけ出しただけなのに、えっ、彼の顔はさらに輝きを増しているではないか。その上、二度目の握手まで。

「何をして？」

「行きたいところいろいろあるからね。」

「ぼくもだ。それでどこに？」

「信州とか、富山とか、北海道にも行きたい。」

「いやあ、まったくいっしょだ。うれしいな。ぼくも行こうと思っている。ボリビアのウユニ塩湖、そしてカナダのオーロラ、それからツバルも、それと…」

三度目の握手に応じながら、心の内でつぶやく。

「どこがいっしょだ。」

30代フリーター　やあ、ジイさん。安倍晋三が衆院予算委員会で桜を見る会の参加者を安倍事務所が募っていたことについて「私は、幅広く募っているという認識ではなかった。募集しているという認識ではなかった」と答弁したことに、ネット上で非難や揶揄が浴びせられた。「とうとう日本語も分からなくなったか？」「これが日本の総理か」といったぐあいだ。

年金生活者　彼のそういう「無知」「無教養」な一面が底堅い内閣支持率を維持する要因のひとつになっていることを見落としてはならない。

世論調査結果にはあらわれない国民の多くの本音を推測すれば、安倍晋三の言葉遣いのおかしさはご愛嬌程度のものと推察される。それにくらべれば「知識」や「教養」をむき出しにする政治家のほうがよほど国民の反感を買う。ある程度の「無知」や「無教養」は国民に親近感を覚えさせる。

これは国民が愚かだとか知恵がないという意味ではない。知識人が持つような「知識」や「教養」は持ち合わせていなくても、自らの生活や仕事にかけては知識人をしのぐ賢さと知恵を備えている。それが吉本隆明のいう「原像としての大衆」にほかならない。その「原像」の部分が安倍晋三の「無知」「無教養」と共振し、政権への安心感を形成していると考えることができる。

30代　麻生太郎も首相時代に「踏襲」を「ふしゅう」と読むなどして「無知」「無教養」をさらけ出した。

年金　彼には知識や教養を小馬鹿にしたところがあり、それがマスメディアの記者たちを見下す言動となってあらわれる。記者は知識人に分類される。日ごろ政治家を批判している彼らが逆に批判される姿に留飲を下げている国民も少なくないはずだ。

吉本隆明は思想の課題を知識をため込むことにではなく、「大衆の原像」を自らの思考に繰り込むことに置いた。それは「無知」「無教養」を思考の対象にすることを意味する。それが政治の課題でもあることを今世紀に入ってからの日本の政治過程は示した。麻生や安倍はそれと知らずにその課題にこたえようとしたように見える。

30代　知識や教養は多いに越したことはないだろう。

年金　「大衆の原像」は吉本のすべての考えの土台となっているのに、飲み込むのが最も難しい言葉だ。天下国家のこと、形而上のことは考えず、自分および近しい人たちの生活のことを考えながら生きる。吉本はそれをいちばん価値ある生き方と考え、それを「大衆の原像」と呼んだ。単に「大衆」ではなく「原像」という言葉を加えたのは、どんな人間もそうした生き方から大なり小なり逸脱せざるを得ないからだ。

30代　そんな生き方はものを考えず生きることじゃないか。

年金　「原像としての大衆」はものを考えていないのではない。自らや近しい人たちの生活のことに関しては、それこそ自分たちの生存かけて考えている。天下国家のことや形而上のことを考えることだけがものを考えることだと思っている知識人にはそれが見えない。

たとえ話をするなら、ゴミの山を前にしたとき、それを片づける手立てを考えるのが「原像としての大衆」だとしたら、片づけずに済ます理屈を考えるのが知識人といっていいかもしれない。理屈を考えることは物事を抽象化すること、行動を留保することにほかならない。

「原像としての大衆」が天下国家のことや形而上のことを考えないのは、その力がないからではなく、考える余裕がないほど真剣に生活のことを考えているからだ。天下国家のことや形而上のことを考えている知識人はそのぶん生活のことを考えるのがおろそかになっている。

30代　吉本のようなことを言うやつは、きっと爺さんみたいない吉本信者だけだろう。

ニュース日記　726

中村　礼治

「大衆の原像」は何を考えるか

年金　知を権力と結びつけたフーコー、性と結びつけたラカンは吉本と重なるところがある。

「ひとつの知の樹立とは、その行使の享楽がその獲得のそれと同じものであるということだ」（ジャック・ラカン『アンコール』藤田博史、片山文保訳）。知ることも、知ることを通して何か考えることも、性的な快楽をともなうことであり、それが知が成り立つということだ。ラカンはそう言っているように受け取れる。

思春期に近い子供にとって、性は行為の対象である以前に、知りたくてしかたがない対象だ。親の目を盗んで性の世界を探索し始める。その断片を知るたびに興奮を覚える。知を興奮とはほど遠い冷静な理性の働きと考える常識をその経験は否定する。

性の欲動のおおもとに、母胎の楽園に帰りたいという願望があるとすれば、知ることは、かなえられない願望の充足の代替とみなすことができる。性交は相手を知るための身体的、心的な動作で満ちている。相手はどうすれば喜ぶだろうか、いま満足しているだろうか、といったことを切実に知りたがる。

性交の代替である恋愛でも、相手を知りたいという願望が募る。「あなたのことをもっと知りたい」が口説き文句にもなる

ラカンは知を知識人の独占物であるかのようにみなす通念を打ち砕いた。フーコーは知を権力に左右されないニュートラルなものと考える錯覚を打ち砕いた。